

# 塞種(Saka)のインド佛教史との交渉

山 田 龍 城

## 一

インド文化史はマウルヤ王朝の出現によつて大きい轉換を見せたが、その没落によつて、また急激な變化を示した。

このような變化は佛教敎團にも反映しているが、アショカの没後に於ける敎團の變化、及び敎説の變化には顯著なものがある。即ち敎團としては部派佛教の時代に入り、諸派の論議はいよいよ盛になるのであるが、西北インドには有部が優勢となり、カニシカ時代に至つてアビダルマの研究は最高調に達し、遂に有部の勝利に歸する。これは自ら正統を以て任ずる長老の率いる敎團の約四百年に亙る動行の傳説的歸結であつて、その歴史的證左としては殆んど見るべきものがない。更に此の時代は大衆を基盤とする層から、大乘の力強い運動が具體的な形を持つようになる時機に相當している。而るにこの運動に就いては、その歴史的背景を知るたよりになる何んな傳説もない。佛陀の説法がレコードになつて數百年

間、龍宮に祕藏されたり、雪山に埋藏されていたと言うのは、取りつく術もないわけである。だが大乘經典については西紀前二世紀から後二世紀の四百年より別な時代に、その成立を考へることはどうしても許されない。従つてインド佛教史にとつて此の時代ほど重要な時期はないと言ふこともできる。不幸にして此の時代はインド史にしても、その思想史にしても、これほど見當のつかない時期はないのである。

ギリシャ人の政權は西紀前三世紀に起つて、インドに地歩を占めることになるが、前二世紀の終るのを待たずしてインドから消失する。インド人の政權シュンガ王朝はギリシャ人をインドから追い出す機をつかんだが、インド内の地方政權の間に挟まれて、その影は薄い。そしてインドは統一なきバラバラの状態を限りなく續ける。シャカ族(Saka, Sakka)がインドに姿を現し、インドを支配し、インド文化と交渉をもつたのは、ちようど此の時期に當つてゐる。從來ほとんど佛教史に於て考へられなかつた問題であるにも拘らず、シャ

カ族の動行が、このような時代を背景としている限り、それを除外すべきでないことがわかるであろう。

ではシャカ族がインドで如何に取り扱われているかと言うに、インド人はこれを殆んど取上げていない。その名はマヌ法典(一〇・四四)に見えるけれども、ドラヴィダ族・ヤヅナ(ギリシャ)族・チーナ(シナ)族と共にその名稱を擧げているに過ぎない。佛教文獻になると民族としてのシャカを知っていたのか何うか疑わしいほどである。インド人は一般にアリアン以外の民族に對して關心を拂わなかつたから、異民族がその文獻に現れないのは當然であるが、それでもギリシャ人は權威ある佛典ミリンダパンハの内にその主人公として重視され、貴霜王朝のカニシカは佛教傳説では極めて重要な人物として聖典に語られている。これに反して、シャカ族はインドの一般文獻にもなく、佛典にも殆んど無視され、その存在さえも忘れられているのである。

だがシャカ族の存在について、その民族の活動、及びその民族の建てた國についてインド外の文獻は、幾多の報告をしている。西方の資料としては、古くギリウスの碑文をはじめ、メガステネスの斷片、及び多くのギリシャ人の史書がある。これをシナに求めても西方資料に劣らないものを有している。例えば史記の傳える大宛王なる母寡はモガ(Mogatahes)とその音が通じて居り、インドにシャカ族の王國

をはじめて建てたマウエスを想起せしめる。母寡に代つて大宛王となつた昧蔡がシャカ族に關係あることを稱える學者もある。<sup>(1)</sup>しかし「塞種」を語るのは史記でなくして、前漢書であるが、本書でも、シナが西紀前のシャカ族を知つていたことを示す點では確實な證據になる。「塞王」の活動、休楯・損毒というシャカ族の國に就いて報告する前漢書には、罽賓(ガンダーラ)に國を建てた同族の風習・政情が詳しく語られている。また後漢書(一八・一一左)になると、商業を營み、富裕な大國としての存在でありながら、弱い種族だと、シャカ族の特質を傳えている。高附國(カール)の名で記されているのが即ちこれである。

斯く古くから西方でも、シナでも、この種族に注意が拂われていたのに、インドがこれを無視していたが爲に、佛教史はシャカ族を會て問題にしようとはしなかつたのである。その可否は別として、問題にならなかつたことは當然と言えるかも知れない。

1 JAOs. 37 (1917), Friedrich Hirth: —The Story of Chang Kiên, p. 145. 又 Numismatic Chronicle, vol. 10, 3d, ser., p. 103 ff. A. Cunningham の「マヤカ貨」により昧蔡を Moas or Maues と當てる。なお、母寡は Mogata に通じるが、碑文・古錢に Maues 王は Mogata, Moa と當てる。Tarn: —The Greeks in Bactria and India, Cambridge, 1951, p. 308. 又、母寡

## 二

大藏經を見るに、佛傳の内に「シャカ文字」という單語が一つ、密教經典に「シャカ住所」という單語が一つ、ただこの二語がそれぞれの文獻にあるばかりである。しかもこれらはシャカ族の存在を問題にしているのではないのである。

資料の極度にとぼしいシャカ族に關係する記録として、これだけでも我々に與える示唆は貴重である。先ず佛傳ラリタヴィスタラの内 Sakāni-lipi (シャカ族の文字)<sup>(2)</sup>とあるが、この名は最古の佛傳マハーヴスツには出て來ない。そしてマハーヴスツにある Yavanī (ギリシャ人の文字)<sup>(3)</sup>は、ラリタヴィスタラに於て消失し、その代りに「シャカ族の文字」となつてゐることが注意せられる。西紀前三世紀から前二世紀にかけてインドに政權を有したギリシャ人は、前一世紀になるとシャカ族によつて替わられ、西北インドの事情は急變する。この情勢を念頭において、上記の兩佛傳に見える變化を注意するならば、それぞれの作者がよくその時代を反映してゐる點を看取ることができよう。同時に兩者の相違點をもつてそれぞれの成立時代を推定する一の尺度とすることもできるわけである。ラリタヴィスタラの漢譯と認められる普曜經 (A.D. 368 譯・大正三・四九八中) には、「夷狄塞」という譯語

が見え、シャカ族に當てて見ることができると、原文は *Yavan* であり、また別にギリシャ人を意味する「大秦」という譯語もあつて、ラリタヴィスタラと相違してゐる。

次に密教部に屬し西紀六世紀譯の孔雀王經<sup>(4)</sup>には「シャカ族住所」なる單語がある。これは明らかにシャカ族の郷土として、アフガニスタンの湖水地帯がインド人の間に知られてゐた事實を示すものではある。しかし佛教敎團とは何のかかわりもないものである。

以上たとい片影でも、その存在が大藏經に現れてゐるのは幸であつた。しかしインド史にとつても、佛教にとつても、何等意味のないものとして取上げられたことが、果してシャカ族の名譽であるか何うか。いづれにしてもインド文獻から縮出されてゐたシャカ族はインドに何かを残したのであろうか。事實インドの内に深く入込み各地を占據し、幾世紀に亘つてインドに政權を保ち、インド文化に關係をもつたシャカ族の期間は長い。だからインド文獻に跡を残さなければ、シャカ族自身の知つたことではないと言ふかも知れない。彼等はギリシャ人の後繼者として、貨幣を多く鑄造した。そして立派にその活動の跡を後世に残したからである。そればかりではない。彼等はアシヨカ<sup>(5)</sup>の衣鉢をついで碑銘を石に刻し、その王朝を永遠に記念したからである。カストの外に置かれ、時にその存在をさええインド人から無視されたシャカ族

塞種 (Saka) のインド佛教史との交渉 (山田)

は、彼等自身でその活動を不朽ならしめる術を心得ていたと言わねばならぬ。計らずも、それはインド史に對し、佛教史に對してかけ代えない資料を提供することになったのである。

2 Lefmann, p. 25. l. 20, *Sakari* について Edgerton, *Highbrid Sanscrit Dictionary* はこれを訂正している。

3 *Mahāvastu*, vol. I, p. 135, l. 5.

4 梁扶南三藏僧伽婆羅譯 (A. D. 506-520) 孔雀王經二卷には「莎柯婆他那」(大正・一九・四五一中・終五行)とある。唐義淨譯 (A. D. 705) 大孔雀呪王經三卷には「鏤迦處」(大正・一九・四六六中・一四行)とある。これは梵文の *Mahā-māyūti* の "*Sakashāna*" であり、ギリシヤ人の *Sakastane* である。經には *Kapishā* (今曰 *Begrām*) と *Vallabhi* (今曰 *Kathiavar*) 諸國と並稱されている。Fleet, *JRAS*, 1904, p. 703; S. Lévi, *J.A.* 1915, p. 19-138, 參照。

三

未解決の部分に満たされているシャカ族の全貌を誤りなく述べることは、現狀に於て餘りにも無謀な企てと言えるであろう。とはいえ、これまで一世紀を越える考古學者の貴重な努力は、おのづからそのデッサンを試み得るに足る成果を収めている。シナの傳えた塞種・ギリシヤの傳えたサカイ・イ

ンドの示すサカ、これらの言葉があらわす民族の外延は、必ずしも一致していない。だがいづれもそのはじめは遊牧の民として、『分散して數國となつて』(前漢書九六・上一〇左)はいたとしても、定住性に缺けていた點は見逃し得ない。またバルチアに接近した時代は、時にバフラフ族と混同され、事實混血も行われたようである。このような諸點を考慮に入れても、なお全體として一つの民族的單位となつていたことは認められる。少くともインドに現れたシャカ族については、確實にそう言うことができるのである。

シナ史書に言う塞王南下の問題には、なお多く考うべき課題があり、假説を立てるにしても種々の疑問に答うべき證據を必要とする。スキチャに關して、ギリシヤ史が語る意味内容についても、その検討は終つたわけではなく、更に一步を進めねばなるまい。だが烏孫に追われた大月氏が、その壓力を西南に加え、その壓力によつてガンダーラ地方に安住の地を求めたシャカ族が、或る時期に於て、アフガニスタンの湖水地帯に、一旦定住の地を固めたことは、何人も否定し得ないであろう。この地方はいわゆる「シャカの郷土」として、*Sakashāna* の名は永遠に記入され、今日でも *Seistan* という名稱となつて、古いなごりを残している。シャカ族の入り込む前は別の名稱であつた。マケドニア軍が侵入した時代、この地方は *Drangiana* の名でしか呼ばれなかつたのであ

る。

さてインドに政權を立てたシャカ族は、その始祖の名と、フルガナ（大宛）王の名と相通する故をもつて、兩者の一致を採用すると、しないにと拘らず、シャカ族の郷土シャカスターナを除いて、シャカ族を語ることは至當でない。碑銘などの證據がこれを許さないのである。

インドに來たシャカ族は二種の群になつていたと見ることが出来る。その一つは西北インドに國を建てたもので、アフガニスタンの底地からヘルマンド河を溯つてインダスの上流、ガンダーラの地に來たもの。その時代はおそらく前一世紀のはじめである。先づタキシラに本據をもち着々として勢力範圍を擴大した。そしてその一部は早くも前一世紀の内に、ガンガー支流ヤムナー河邊に南下している。東西交通の要衝であり、佛教・ヂャイナ教が榮え、クリシュナ信仰の本據たる宗教都市マツラーに根を下した一族がそれである。

他の一群は湖水地帯から東南に道を取つた。その通路に横わるポーラン峠を越え、其處はインダスの下流である。

インダスのデルタ地帯に「シャカの島」（シャカドヴィーパ）という名稱があるのは、同族南下の記念塔である。それより更に海岸沿ひに住み良い地を求めて進んだ彼等は、ついに「豐饒の地」（スラーシュトラ）を發見した。マウルヤ王朝の諸王が治水の爲に心を用いた實り豊かな地は、シャカ族進

出の足場として不足はなかつた。今のカチアワール半島がそれである。これよりナルマダー北邊一帯を蓋うマールワール地方はもとより、西紀一世紀から二世紀に互つて、遠くボンベイ附近まで進出したのである。

以上の如く、シャカ族は進路を別にして、北と南からインドの一角を手中に収めたのであるが、相互に牽制し合うようなことはなかつた。分散した王家の親族は、遠くはなれてゐる地域の間でも、緊密なつながりをもつていた。これはシャカ族が長くインドに政權を保ち得た一因と見られる。西紀前にその一步を印してから、その後約五百年インドに生き延びたシャカ族は、クシャーン王朝が覇權を握つてからも、その下でクシャトラパ（太守）として地方政權を擔當している。

ギリシヤ人は王（*Basilios, Rāja*）とつて、或は救世主（*Soter, Trātara*）と言ひ、また大王（*Mahārāja*）とさう稱號をほこり、ペルシヤ系のパフラヴは王中王（*Basilios Basileon, Rājārāja*）の稱號をもつて、インドに號令したのであつたが、一般にシャカ族は控え目なクシャトラパ（太守）の名稱で満足し、そのはじめから地方政治に臨んでいた。この仕方は、名を捨て實をとる此の種族の性格を示し、シャカ族が長く政權を保ち得たもの一つの因と見られる。更にシャカ族が榮えた原因として、彼等が好い時機に遭遇した點を挙げねばならぬ。後漢書が語る如く、商業を得意とした同族は、西紀前

後から急速な發展を見せた海上貿易を利用する地位にあつたことである。當時西インド沿岸一帯は、外國との商取引によつて未曾有の繁榮を示した。アラビア・エジプト及びそれらを通して地中海諸國との貿易は西インド南インドの經濟をゆたかにしたのであつた。この財力は一方アンドラ王朝の文化を育てる原動力となつたのも否定し得ない。しかし或る時期に於て、シャカ族はアンドラ王朝を退<sup>(8)</sup>ぜ、インドの重要な貿易港を一手におさえた跡をさえ残している。このような事情がシャカ族の永續した一因となつていたことも見逃し得ない。

あたかも此の時期に於て、佛教敎團はシャカ族の支持を得ている。またシャカ族と抗争するアンドラ王朝からも保護を受けた。このような恵まれた機會に出會つた佛教敎團として、善かれ悪かれ何等かの變化を受けぬはずはない。先ずシャカ族と佛教との關係を一瞥しよう。

5 J. W. McCrindle 1885. *Ancient India as described by Ptolemy* (A. D. II.) pp. 283-5, 325.

6 タキシラ出土のパーチカ銅版 (Konow, no. 13) は、Moga 大王七八年の記録をもつて有名である。この内 Chukhshe の太守なる Liaka Kusulaka の子 Patika による舍利奉安の記がある。又マツラー出土の獅子頭銘 (Konow, no. 15) はマハークシシャトラパ Patika の名を出し、Sakastana をも引合に出

す。シャカ族がシャカスターナに關連して親屬結合の證據である。

7 CHL. vol. I. Map 5, *Sakadvīpa* を示す。アショーカ法勅のあるギルナルの岩壁はシャカの大クシヤトラパ Rudradāman による刻文があり、チャンドラグプタ王の治水事業と孫アショーカ大王の治水を記し、シャカ族が更に貯水池の修理に當つた記録を残す。(I. A. 1878. vol. VII. p. 257 ff. Lüders, No. 965.) この石には後のスカンダグプタによる長文の碑銘もある。

8 Periplos Maris Erythraei, McCrindle, trans. 1879. 村川堅太郎譯、エリュトウラー海案内記、五二節、及びその「註」參照。

#### 四

西紀前一世紀マウエスがインドにシャカ政權を建てた時、インドの西北タキシラを中心として、佛教が行われていたことは、殆んど疑いない。ギリシャ人テオドロスが佛舍利を奉安した證據もある。<sup>(9)</sup> 有名なパーティカ銅版により、マツラー太守の銘によつて、シャカ族が佛舍利を奉安した事實も知られてゐる。

しかしマウエス自身が熱心な佛教信者として、自ら鑄造した貨幣に佛像を刻したという、ターン博士の主張は、シャカ

族に對する正しい理解を缺くものと言わなければならぬ。シャカ族はトルコ系と考えられるが、一般に獨自の文化をもたず、その地にあつた先在の文化を容易に攝取する素質を有していた。だからギリシャ人の貨幣を模倣すると共に、インド文化を取入れ、後には佛教を支持し、バラモンにも奉獻を怠らないのである。これらの事實は宿院に残された銘を見れば明らかであるが、アシヨールカ王が佛教を特に支持したものと趣を異にしている。シャカ族には文化に對する選擇もなく、獨創性も見られない。マールシャルは已にマウエス貨の佛像を否定しているが、カニシカ以前二百年佛像の貨幣がマウエスによつて創始された見解は、如何なる點からも支持されない。<sup>(10)</sup>

それではシャカ族政權の最初の指導者としてマウエスは、如何なる宗教をもつていたか。この問題に答える積極的な資料はないけれども、タキシラの一角 *Janjira* に見出されたゾロアスターの寺院の如きは、ゾロアスター教の發祥地であり、シャカ族の郷土であるシャカスターナとシャカのインド侵入時代のインドとの結合を暗示する一例と見ることができ。これによつてシャカ族がインドに侵入した當初には、シャカ族の間に受けつがれたゾロアスター教を持ち込んだという推定ができるかも知れない。しかしインドに在住して年月を経ると、その地に榮えた宗教を無雜作に取り入れるので

ある。この事實を報告するものは、彼等が残した宿院の銘文<sup>(12)</sup>である。即ち彼等は佛舍利を奉安し、僧房を寄進し、土地を捧げ、村を寄附し、比丘に衣食を給し、四方僧伽に供養する。しかしここに注意すべきは、これらが佛教に限られていない點である。彼等はより豊富な寄進をバラモンに對しても實行した。即ち同じ銘文の内に、彼等はバラモンに幾十萬の牛を奉納し、村落を寄進し、浴場を獻納し、毎年十萬のバラモンに施食し、八人のバラモンに妻を施すなど、自らの善行を誇示するに勉めている。これらをそのまま彼等の信仰の現れと見るのは速斷にすぎよう。銘文の言葉から見ても、これらの行爲は同族繁榮の爲であり、同時に彼等の經濟政策とながることを見逃すべきではないと思う。

これらの銘文は混交梵語でナールシク市に、プラークリットでカルレー市に刻し、地方的言語を採用する點では、アシヨールカの故智を模したものと見える。しかし内容は信仰を示す尺度として、彼等の佛教教團に對する純粹性を認めることは難しい。インドの古典劇の作家が「シャカ族の後裔」(*Sakya*)の名をもつ、王の義弟を道家者と爲してシャカ族を揶揄<sup>か</sup>つてゐるのは、ただ異民族だからとの理由だけではないようである。彼等の残した碑銘は、むしろ、彼等が生きていた時代の社會・宗教を反映する記録と見ることに於て、その意義を認むべきものと考えられる。

塞種 (Saka) のインド佛教史との交渉 (山 田)

9 Know, No. 1, Theodros はタキシラより北スワートに在つて佛舍利を奉安してゐる。

10 文化一八・三(二九・五月) 拙稿「インド古錢とインド文化史」参照。

11 Marshall, A Guide to Taxila, 1921, p. 92, 93.

12 Nasik 碑文<sup>14</sup> Lüders: —No. 1131. Kärle 碑文<sup>15</sup> Lüders: —No. 1099.

13 Mirochakatikam に現れる Samasthānaka.

## 五

ボンベイから東北一八二軒にあるナーシクは、南インドと、ゴードワリー河によつて結ぶ樞要な古都である。シャカ族はこの地の宿院(第八窟)に佛教教團を支持した記録を残し、上記の銘を刻りつけたのであつた。當時の主長ウシバダータはクシヤハラータ家のナハバーナの女婿である。養父ナハバーナの娘即ち皇后は、佛教信者として皇后の名で二三の宿院を寄進しているが、ペルシャと生々しい関係をもつディーニカを實父として生を受けたウシヤバダータには、シャカ族の勢力を延ばすことが先決の課題であつた。彼は信仰の爲よりは、寧ろ政策の爲に佛教を支持し、バラモンに寄進した。彼の時代には南インドのジュンナル及びカルリーにその勢力は及んだのである。

ナーシク第三窟(Lüders: —nos. 1123-1126) はアンドラ王朝が次に現れて、シャカ族を征服する記録をもっているが、これは英主ゴータミープトラの年代(A. D. 120)の數字をもつ點で歴史的に特に重要である。これによれば大衆部系なる法上部・賢胄部のアンドラ治下で育成されたことが知られ、佛教史によつて興味ある問題を提供している。しかし更に教團として大切な點は、シャカ族から沒收した土地が佛教教團に寄附されていることである。これにより兩政權の抗争の間にあつて、佛教教團が政治的對立の渦中に置かれたことがわかる。教團が否應なしに種々の影響を受けたことは言うまでもない。アンドラ王朝下に於ける教團問題はしばらく別とし、今シャカ政權下に於て、教團維持に關する新しい方向が創始されたことを、我々は碑銘(Lüders: —no. 1133)の中に發見する。それはウシヤバダータが教團になした三千金の寄附に關してである。織物業者は組合をもつて金融その他の事務を處理していたが、比丘に對する衣服などの支給の爲に、この組合が利用されている。三千金の内二千金は一の組合に貸しつけ、一千金は他の組合に貸しつけ、約束の利率(各組合で異なる)による利子を以て教團の資に當て、元金の拂戻しを許さない。そしてこれらのことは組合の集會所に公示する方式がとられた。曾ては教團分裂の原因となり、ガンガー沿岸の總教團が、東西に分れて紛争にまき込まれ、第二結集の



動機ともなつた「金銀受納」の問題は、ここでは見事に處理されたわけである。このような意圖を寄附者がつていたと否とは彼等の問題でなかったとしても。

14 Nasik Liders: —nos. 1132, 1134.

## 六

シカ族が佛教敎團に對して有した役割、そして佛教史に如何なる變化を與えたか、このような問題に答える段階には現在として未だ到達していない。しかしサンスクリットが有部敎團で公認の言語となつた課題を取り上げて見ても、シカ族が混交梵語を西インドで使用していたこと、般若經典が南インド・西インドから西北インドに移行した傳えとを併せて考えるならば、佛典に梵語が採用された端著を、ギリシヤ人の文化圈に限ることは再考されねばなるまう。

また北タキシラの Jaulian (Guide to Taxila, p. 118) に、また、南キストナ下流ナーガルジュニーコンダに、それぞれ美術史家がシカ族と認める浮彫のあることを附言すべきであらう。前者は佛陀をめぐる僧衣の十二人の間にある人物、後者は門の袂に立つ人物、いづれもベルトのある筒袖の上衣、ボタンの付いたズボン、ふちどつた山形<sup>(15)</sup>の帽子、髻を蓄えている點まで同じである。この外マツラーにもクシャー<sup>(15)</sup>ン時代の類似的の像があるという。佛教の學問・佛教の敎理な

どに關係うすく、經典・傳説に現れる機會を失つたシカ族は、敎團の外郭にあつて佛教の護持に任じたかの如くである。そのような事情が、はからずもこれらの彫刻によつて後世に傳えられたと見ることができる。

(本研究は文部省科學研究費による研究の一部である)

15 靜谷正雄氏譯註、ブラーフミール文字「インド佛教銘文」クシ

ヤーナ時代、二八頁第六三。Liders: —no. 1401.

## 新刊紹介 2

宮本正尊編「大乘佛教の成立史的研究」

- 第一章 大乘佛教の成立史的基盤
- 第二章 大乘佛教の倫理思想
- 第三章 大乘佛教の論理思想
- 第四章 インド思想と大乘佛教
- 第五章 大乘經典の性格
- 第六章 大乘佛教成立の社會的背景
- 第七章 大乘佛教の敎團史的性格
- 附錄第一 大乘經典の成立時代
- 附錄第二 中論頌梵漢藏對照索引 (別冊)

索引

(A 5 五二〇頁 別冊四八頁 三省堂)